2024年度 スポーツ評価型選抜　小論文問題

次の文章を読み、問いに答えなさい。

野球の楽しさ、面白さと国際大会のすそ野の広さ――。野球界が国・地域別対抗で競うワールド・ベースボール・クラシック（WBC）の2週間に、スポーツの豊かさと多様性を改めて実感した人もいたことだろう。

なぜこれほどに盛り上がったのか。何よりプレーの質の高さが魅力的だった。時速160キロを超える快速球や、飛距離140メートル級の本塁打に加え、外野手の守備範囲の広さ、盗塁をめぐってタッチを狙う野手とかいくぐる走者との妙技の応酬など、大会を通して目を離すことができない場面ばかりだった。

「野球途上国」の躍進も記憶に残る。予選を突破して初出場の英国が勝利をあげ、選手の大半が他に職業を持つアマチュア集団のチェコも、初出場での1勝に加えて技巧派右腕が大谷翔平選手から3球三振を奪い、その可能性を感じさせた。

国際的にみれば、野球は北中南米と東アジアが中心で、その普及は偏ってきたが、大リーガーの多国籍化は進む。不毛の地だった欧州でもバットやグラブを手にする機会が少しずつ広がっている。球場は他競技との併用が難しいといった問題はあるが、流れを着実に広げたい。

「国際化」では米国育ちの日本代表ラーズ・ヌートバー選手も印象深い。親のどちらかがその国で生まれるか国籍を持つことでも代表資格を認めるなど、幅が広いこの大会で、選手が語る「母国」への心情とその物語は魅力的だった。国籍を超えた共同作業はスポーツの妙味の一つだろう。

WBC全体が進化する中で、日本代表の奮闘ももちろん評価されるべきだ。大リーグで過去3度MVPのマイク・トラウト主将が参加表明したことで多くのスター選手が集まった強力な米国チームに、競り勝った。なかでもダルビッシュ有投手と大谷選手の存在は格別だった。

キャンプ開始当初から参加したダルビッシュ投手は若手選手と対等に向き合い、柔らかな言動でチームを円滑に動かす「化学反応」を起こした。投打で仲間を鼓舞する大谷選手の振る舞いと合わせ、両輪のどちらが欠けても頂点は難しかったろう。いく通りもの起用法から、選手の力を最大限に引き出す栗山英樹監督の判断力とかみ合っての結果だった。

日本と劇的な準決勝を演じたメキシコの監督は「今夜の試合は野球界そのものの勝利だ」と話した。大会全体の評価にも通じそうな言葉だった。残念なことに、日程や組み合わせなどの運営は米国と日本中心の興行優先にみえた。最低限の公平性を保たねば国際大会の看板に傷がつく。次回への課題だ。

出典：「野球の祭典 熱狂の中に見えた未来」『朝日新聞』2023年3月23日　朝刊

問 1　著者が野球の祭典ワールド・ベースボール・クラシック（WBC）に注目したこと、また感じ取ったことを5つにまとめなさい。（各40字以内）

問 2　準決勝で日本に惜敗したメキシコチームであるが、なぜメキシコの監督は「今夜の試合は野球界そのものの勝利だ」とコメントしたのか、その理由を説明しなさい。（100字以内）

問 3　著者は最後の文章で「公正性」について見解を述べている。あなた自身のスポーツ経験を通して、日ごろから思う「スポーツと公平性」をテーマに述べなさい。（300字以内）

以　上

出典追記：承諾番号：24-0680
朝日新聞社に無断で転載することを禁じる